
我は希う、混沌の其の先を

かなえ秀雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我は希う、混沌の其の先を

【Nコード】

N1901W

【作者名】

かなえ秀雄

【あらすじ】

（割と自由な）軟禁生活五十周年を祝う為、アスガルド帝国第四皇女ゼルダは御供の二人を連れて猪狩りに出掛けていた。居候先に帰ると、アスガルドから使者が来ていると知らされ……。

念の為にR15、残酷な描写ありの警告タグをつけています。言葉遣いがちよつと下品かもしれないです。

人物メモ（前書き）

物忘れ防止のメモです。

尚、この物語には、魔法が使えない、特殊能力がない純粋な人間は出てこないです。

人物メモ

ゼルダノ一応[♀]、偶に[♂]。

グリゼルデイス・クセーニア・アルファズル。主人公で、二つ名は^{くろはがね}”黒鋼”。

何だか色々と規格外な最強と謳われる種族”アルファズル”で、アスガルド帝国の第4皇女（第10子）。

諸事情によりニヴルヘイムに50年程軟禁されているのだが、本人は（割と自由な）軟禁生活を非常に楽しんでいる。

外見は少し癖のあるプラチナブロンドに碧眼で、角と尻尾が生えている。

女（普段）の時は12〜14歳くらいで少年に近い体型（要するにまな板）をしており、男（偶になる）の時は10代後半〜20歳前後で長身（ベルトよりは低い）。時折、黒い鱗を持った翼竜に変身する事もある。

見た目は割と良い方なのだが、ベルガの巨乳（爆乳？）をこよなく愛するおっぱい星人なのと、ちょっと方向音痴なのが玉に瑕。

ベルガノ[♀]

アマルベルガ・マルクス。ゼルダの守り役兼精神安定剤。

紫がかった黒髪と真紅の双眸、そして誰もが羨む巨乳（推定Iカップ）を持つ美女で、外見年齢は20代中盤くらい。

癒しの力を有する種族”ヴァン”と好戦的で吸血能力を有する種族”デックアールヴ”の混血で、能力は前者、外見の特徴は後者の血を強く出ている。

言葉遣いは丁寧で人当たりも良いが、何だか女王様。

主であるゼルダを敬っているのかいないのか分かり辛い扱いをすることも多いが、ゼルダ第一主義。

ちよつとした四。元ポケットと化している黄金の谷間からは、鞭が出てきたり、お菓子が出てきたり。
老若男女いけるクチ。

ベルトノ♂

ベルトラム・フォーゲルヴァイデ。ゼルダの守り役。

限りなく黒に近い暗く深い赤い髪と、琥珀の目を持つ美丈夫。外見年齢は20代後半に差し掛かったくらい。

次元、空間、闇（影含む）を自由自在に操る種族”スヴァルトアルヴ”で、背中に鳥のような翼を持っているが、本人曰く「邪魔くさい」とのこと。基本的にしまいっぱなし。翼は鴉のように真っ黒で、それゆえに鴉と呼ばれることもある。

無表情且つ口数は多くはなく空気になりやすいが、根は優しく、氣遣いは出来る方で意外と子供に好かれる。

戦闘になると活き活きとする戦闘狂の気があり、築いた屍フレズウェルの山は数知れず。そのせいでつけられた不名誉な二つ名は”屍を貪り食うもの”。

ルーディノ♂

ルトヴィヒ・クラウド・ファウスト

淡く青味がかつた銀髪に金瞳に、牛乳瓶の底のように分厚いレンズが嵌った眼鏡をかけている。長身。

外見年齢は20代前半くらい。

魔術などに長けた種族”ニベルンク”で、ニヴルヘイムとヘルを支配するファウスト一族の分家の一人。

基本的に人が良くて、とある人物に対してはヘタレだが、偶に黒さを見せることがある。

ヨハネス・ゲオルク・ファウストノ♂

通称”死にかけ公爵”、或いは”歩く傍迷惑”。

ニヴルヘイム公爵で、ゼルダの身元引受人。ファウスト一族本家の当主。

鮮やかな紅色の髪にエメラルドの双眸をした”ニーベルンク”で、病弱らしく常に肌は青白く、目の下にはどす黒い隈が出来ている。

外見年齢は40代手前くらい。

ぼそぼそと通りの悪い声で抑揚もなく一本調子で独り言を呟くように、且つ被害妄想が入っているかのような話し方をする（予定）
ゼルダは親しみを込めて”ハンス”と呼んでいる。

皇女殿下は猪狩りに

北の大地ニヴルヘイムは、”霧の国”と称されるほどに霧の出る日が多い。

そうではない日でも蒼穹は常に雲に覆われ、太陽の光は地上に届き難く、外の面は薄暗く、必然と暗くなる室内は日中でも灯りを灯すことも少くない。

見慣れた曇天の下、僅かに草木が生えているだけの荒れ野に人影が二つある。

軍服によく似た作りの黒い装束に身を包んだ黒髪の美女に、角と尻尾が生えた白金に近い金髪の少女が抱きついており、美女の豊満過ぎる胸の谷間に顔を埋めている。

——一体、何をしているのだろうか？

「ベルト、獲物は近くにいますのかしら？」

真紅の双眸が、徐に空を仰いだ。

紫味を帯びた黒髪を高く結い上げた美女アマルベルガ・マルクスは、艶っぽい声音で誰かに語りかけている。彼女の視線の先の遙か上空

——ニヴルヘイムの空を埋め尽くす雲の付近に、烏を思わせる漆黒の翼を背に持つ男が重力を無視して浮かんでいた。

「目標の体長は馬程度、六頭の群れを成して北北東の方角より此方へと向かって移動してきている。二分ほどで、其方の視界に入ってくるだろう」

限りなく黒に近い暗く深い赤色の髪の下にある琥珀色の目は、豆粒ほどの大きさにしか見えない獲物の動きを確りと捉えているらしい。

地上を見下ろし獲物の動きを観察しているベルトラム・フォーゲル
ヴァイデは、感情の色の見えない声で淡々と告げた。

「了解致しました。引き続き、獲物の動向に目を光らせていてくだ
さいな。何かありましたら、随時連絡を」

「了解した」

地上と上空で交わされていた会話を終える。

ベルガは自らの胸に顔を埋めている少女に目を向けると、妖艶な笑
みを浮かべた。

「ゼルダ様。ベルトからの報告によりますと、あと二分ほどで北北
東の方角に獲物の姿が見えてくるそうですわ」

「ふむ」

蜥蜴のような黒く長い尻尾をゆらゆらと動かして、グリゼルデイス・
クセーニア・アルファズルはゆっくりと顔を上げ、淡い色合いの碧
眼を細める。

「汝のイヤホンから音が少し漏れておったので、聞こえていたぞ」
なれ

ベルガの左耳に付いている耳飾りを指で軽く弾くと、ゼルダは彼女
の腰に巻きつけていた細い腕を解いた。

「そうですわね、”アルファズル”たるゼルダ様の聴力を侮ってお
りましたわ」

角と尻尾を持つ種族”アルファズル”は身体能力が高く、五感も非

常に鋭い。先の尖った長い耳にそつと指で触れると、ゼルダは擦ったそうに身体を振った。

「……さて、そろそろ北北東の方角を眺めているとするかの」

アスガルド帝国第四皇女であるゼルダは、故あってニヴルヘイムでの軟禁を強いられている。だが本人は、軟禁先の行為である程度 of 自由を許してもらっており、その生活をとて楽しんでた。

そして遂に迎える、明日の夕方に行う予定の”軟禁生活五十周年記念パーティ”の席には、”アレ”が必要不可欠である。大事なおかずを手に入れる為に、守り役であり近衛でもあるベルガとベルトを引き連れて、ニヴルヘイムの荒れ野にやって来たのだ。久し振りに暴られるのだと思うと、自然と口元が綻ぶ。

「ゼルダ様。其方は西北西の方角に御座います。北北東は此方になりますわ」

方位磁石で方角を確認していたベルガがはゼルダの両肩を掴み、くると方向転換させた。

ゼルダは少々、方向音痴である。堂々と間違えてしまった事が恥ずかしいのだろうか、顔を赤くしてはにかみながら、北北東の地平線をじつと見つめる。

「うむ、ベルトが言っていた通りだの」

天を突くほどに長く伸びた二本の牙を持つ巨大な猪——セーフリムニルが少数の群れを成して、土煙と地響きを引き連れて猛進してきているのが、ゼルダの視界に入ってきた。

セーフリムニルとは、この世界に広く生息している猪の名称である。臭みが少なく肉質が良いこの猪は、この世界では慶事等々の際

の御馳走として出される事が多い。

セーフリームニルは本来は豚よりも大きい程度なのだが、ニヴルヘイムや隣の巨人族^{ヨトゥン}の国ヨトウンヘイムに生息しているものは馬と同等、若しくはそれ以上の巨体を持つ。

故に、油断をすると死に繋がることもあるのだ。

（それにしても、殺^やり甲斐のある大きさだな）

獲物の姿を確認したゼルダは目を輝かせ、尻尾を大きく揺らしながら舌なめずりをする。

「ベルト、戻っていらっしやいな」

セーフリームニルの群れがゼルダたちの姿を捉え、轢き殺そうと走る速度を更に上げてきた。これならば逃げられてしまうこともないだろうと判断したベルガは、耳飾りに内蔵されているイヤホンを通して、上空にいるベルトに語りかける。

すると直ぐに彼女の側の空間が歪み、その中からベルトが現れる。地上に戻ってきた彼の背からは、いつの間にか翼が消えていた。

「楽しい狩猟の時間である。行くぞ、ベルガ、ベルト！」

鋭い八重歯を唇の隙間から覗かせ、にやりと笑うゼルダは胸の前で拳を打ち鳴らす。

「「御意のままに、我が君」」

ベルガは胸の谷間から鞭を取り出して先端を地面に叩きつけ、ベルトは腰に佩いた長剣を鞘から抜き払い、左手に構えた。

此方と獲物の距離が20メートルほどに縮まったところで、ゼルダが先陣を切って走り出す。荒れ野を吹き抜ける一陣の風の如き速さで一気に距離を詰めると、彼女は大きく跳躍し、空中で一回転をしてからセーフリームニルの脳天に踵落としを決める。

ゼルダの小さな身体からは想像し難いが、彼女は三人の中で最も筋力が強い。大砲にも匹敵する威力を持った踵落としを喰らった猪は、断末魔の雄叫びを上げながら地面の上に倒れ伏した。

「うむ、やりすぎだな！」

力の加減を間違えてしまった所為で猪の脳天は深く陥没して頭蓋骨が覗き、頭の中身が圧迫された事で収まりきらなくなった目玉が二つ飛び出してしまっている。びくびくと痙攣を起こしていたそれは、間もなく息絶えて沈黙した。

一方、戦闘に向いていなさそうなベルガはというと。

「あらあら、逃がさなくてよ？」

猪の首に鞭を巻きつけ、ギリギリと締め上げて窒息させていた。

白目をむき、口から泡を溢れさせている猪の姿に、ベルガは真紅の双眸を満足気に細め、恍惚とした表情を浮かべている。

「ベルガ。一息に殺ってしまった方が楽ではないか？」

長剣の刃に付着した血液を振り払いながら、ベルトが此方へと歩み寄ってくる。彼の背後には、首と胴を分かれた猪の死骸が二つ転がっていた。

「あら、貴方方だけで事足りているのだから、一頭くらいはあたくしがやりたいように殺つても宜しいのではなくて？ 貴方の趣味は首と胴を泣き別れにすることでも、あたくしの趣味はじわじわと鬭り殺すことですよ」

直ぐに樂にしてやるのはつまらないと言って、彼女は艶然と微笑んだ。その目には、俄かに残忍さが潜んでいるのが窺えた。

「……よく知っている。無粋なことを言って、失礼したな」

「いいえ。謝罪なさらなくても結構ですよ？」

次の瞬間、二人の間を巨大な何かが凄まじい勢いで通り抜けていき、その先にあつた何かにぶつかって、ドゴン、と大きな音を立てた。二人が其方へと目を向けると、其処には岩に激突して絶命している猪の姿があつた。

「すまぬ、二人とも。見ておらなんだ。だが、決して態ではないのだぞ？」

両手で猪の死骸を引き摺りながら、ゼルダが歩いてくる。どうやら、

彼女が猪を投げ飛ばしたらしい。一つ間違えたら二人を巻き込んでしまっていたらうことに気が付いているらしく、ばつの悪そうな表情を浮かべて、只管に態とではない事を主張している。

「……ふふふ。ゼルダ様、おいたはいけませんわよ？」

ゴキンツ。

首の骨を圧し折られた猪は、声を上げることなく息の根を絶たれた。身の危険を察知して硬直しているゼルダに向けて柔和に微笑んではいるものの、ベルガの全身からはどす黒い負のオーラが溢れ出ていた。

「すいませんでした、女王様」

両手で持っていた猪の死骸を離して、ゼルダは従者に対して最敬礼で謝罪をした。このような場合に陥った時は素直に謝った方が良く、ベルガとの長い付き合いで覚えたのだ。というよりも、そのように”躰けられた”が正解か。

「あたくしが主であるゼルダ様に憤るなど、ありえせんわ。ただ、一月ほど”おっぱいぱふぱふ”は禁止させて頂きますわね。御仕置きは必要で御座いましょう？」

それは、ゼルダにとって青天の霹靂だった。一気に顔色を失い涙目になったゼルダは、大慌てでベルガに縋りつく。

「御免なさい、御免なさい、御免なさい、”おっぱいぱふぱふ”禁止だけは勘弁してください、それだけは、それだけはあゝゝゝ！！！！」

彼女らの言う”おっぱいばふ”とは、ベルガの豊満な胸に顔を埋めたりする行為の事を指す。

それを愛してやまない”おっぱい星人”のゼルダは、禁止されることを極度に恐れている。彼女にとって、その行為は精神安定剤の役割を担っているからだ。

(……さて)

従者に対して平謝りしている情けない姿を見せる主を余所に、ベルトは黙々と後片付けをしていた。ゼルダに助け舟を出すと自分にも被害が及ぶのは分かりきっているので、彼は哀れ(?)な主を見捨てて他人の振りを決め込んでいるのだ。

(唯一原型を留めているのは、ベルガが仕留めた一頭だけ、か)

自身が仕留めた二頭は首を落としてあり、ゼルダが仕留めた三頭に至っては、なかなか無残な状態の死骸となっている。まあ、元々食肉にするつもりで狩りにやってきたので問題がないといえば問題はないのだが。

(……しまったな)

セーフリームニルの毛皮は丈夫で物持ちがよく、また、牙は彫刻品の材料に用いられる為、市場では割と高額で取引されていることをベルトは知っている。

使い慣れた長剣にガタがきているので、修理、若しくは新品を購入する代金を毛皮と牙を売って捻出しようと目論んだのは良いのだが、何分気が付くのが遅すぎた。

——使えそうな部分だけでも売りに行ってみるか。

その考えに辿り着いた時、ベルトは後ろから声をかけられた。

「ベルト、準備は出来ておるか？」

「……はい」

振り向けば、其処には燃え尽きたような表情をしたゼルダがいた。どうやら、何とかベルガに許して貰えたようだ。

「うむ、戻るとしようかの。頼むぞ、ベルト」

「畏まりました」

ベルトの影がざあつと広がっていき、自らとゼルダ、ベルガ、そして仕留めた獲物たちを飲み込んでいく。その影が消え去った後には、彼らの姿はなかった。

背中に鳥のような翼を持つ種族”スヴァルトアールヴ”であるベルトは、空間を歪めて別の場所へと転移する能力を有している。

彼が操る”闇”に包まれ、そして解放された時、彼らは荒れ野から見慣れた屋敷の裏庭へと転移していたのだった。

「ベルガ、小屋の扉を開けておいてくれないか」

「ええ、宜しくてよ」

彼は”闇”の他に、重力にも干渉出来る。馬ほどある巨体を持つセーフリームニルにかかる重力に干渉して無重力にし、ふわふわと浮かせる。重さを失くした猪の死骸を掴んでは、作業小屋の中に放り込んでいく。

「儂も手伝ってやろう」

傍観しているのはつまらないと、ゼルダは手伝いを申し出たのだが、二人はゆるゆると首を左右に振った。

「丁寧に御断り申し上げます」

「……むう」

深々と頭を下げて、ベルトがゼルダの申し出を断る。その対応にむかつ腹は立てるものの、ゼルダは咎める事はしなかった。彼がそのようなにする理由は、知っている。

大雑把で不器用なゼルダに任せようものなら、折角の御馳走（加工前）は今度こそ、原型が何であつたのかさえも分からないグチャグチャの肉塊と化すのは間違いない。

「これらの処理は、ベルトや料理人たちに任せましょう。お疲れではありませんか、ゼルダ様。お茶の時間に致しませんこと？」

居候先自慢の料理長がこさえてくれた美味しいお菓子があると言って、ベルガはすっかり拗ねてしまっているゼルダを宥める。

「……そうする」

「畏まりました。ベルト、後のことは任せますわね」

「ああ」

いつの間にやら”闇”を使って料理人を数人連れてきていたベルトに声をかけた後、二人は母屋へと向かっていった。

裏庭のある北棟と東棟の間にある小道を抜け、曇天の下でも育つ美しい色とりどりの花々が咲き乱れる中庭を通り抜けて、母屋として使用されている南棟へと足を踏み入れる。

ゼルダに与えられている私室は、この棟の二回にある。中庭へと出る扉の直ぐ側にある階段を中ほどまで上ったところで、二人は柔らかく心地の良いテノールに呼び止められた。

「ああ、良かった。帰っておられましたか」

玄関へと続く廊下の方から歩いてきたらしい長身の青年は、階下から二人を見上げて、にっこりと微笑んだ。

「ルーディ！」

軽やかに階段を駆け下りたゼルダは、彼の前に立つ。ベルガも静かに続いた。

「ゼルダ様、おかえりなさいませ」

「うむ、ただいま」

淡く青味がかった銀髪に金瞳をしたルートヴィヒ・クラウス・ファウストは、恭しく一礼した。そうしたことで眼鏡——牛乳瓶の底の様に分厚いレンズが嵌っている——がずり落ちそうになり、彼は慌ててかけ直した。

「お姿をお見かけいたしませんでしたが、どちらに御出でになられていたのですか？」

「明日の宴の為にセーフリームニルを狩ってきたのだ。六頭も仕留めたのでな、使用人たちにも振舞ってやるが良いぞ」

「畏まりました、そのように致しましょうね。彼らもきつと喜びます。ああ、君……」

「何か御用で御座いましょうか、ルートヴィヒ様」

近くを通りがかったメイドに料理長への言付けを頼んだ彼女は、彼女の姿が見えなくなるのを確認してから、ふっと表情を消した。

「如何したのだ、ルーディ？」

人の良さそうな笑みを浮かべている事が多い彼が表情を消す時は、何か重要な事柄がある時であるとゼルダは知っている。

「お伝えしなければならぬ事が御座います。只今、アスガルドから使者殿がおいでになられまして、ニヴルヘイム公が応接間にて応対なさっております。その使者殿が第四皇女殿下に拝謁を許されたいと申しておられるのですが……如何致しましょう？」

”アスガルド”という地名が耳朶に触れた瞬間、それまで楽しそうに口元を綻ばせていた顔が仏頂面へと変化を遂げた。

「……ベルガ、儂の振りをして使者とやらの相手をせよ」

会いたくはないのだが、向こうの目的が何であるのかは知りたい。ベルガに影武者を務めろと命令を出してみたが、彼女は笑顔で首を横に振った。

「あたくしでは御身の影武者はつとまりませんわ。」アルファズル”たる証拠の角と尻尾が生えてはおりませんし、第一、全くと言って良いほどに容姿が微塵も似通っていませんわ」

——特に、胸部が絶望的なほどに。

やはり無理があったかと、ゼルダは忌々しそうに舌打ちをした。

「ゼルダ様は御気分が優れぬようで伏せっております、と申し上げておきましようか？」

アスガルドの関係者に対して、ゼルダが良い感情を持っていないことを知っているルーディは、対面する事を拒否しても良いのだと進言してくれる。

「否、それはせずとも良い。五十年も放置しておきながら、今更ながらに使者なぞを送ってくるのだ。余程に大事な用があるのだろうか。乗り気はせぬが、会ってやろうではないか」

気に入らない輩であれば、一撃をお見舞いしてくれる。

ゼルダが悪魔のような笑みを浮かべると、断るだろうと踏んでいた

ベルガとルーディが驚きを隠わにして目を見開いていた。

「ベルガよ、ついて参れ。……儂の傍にいよ」

何でもないかのように振舞っている心算だったのだが、無意識のうちに傍に控えているベルガの袖を掴んでいた。その手は、微かに震えていた。

「……御意のままに、我が君」

主が隠そうとしている不安を和らげようとベルガは微笑んで、袖を掴む小さな手に自らの手を添わせる。彼女の体温が伝わってくることで安心したのか、ゼルダの手の震えは治まっていった。

「……然し、使者とやらは一体何をしに此処へとやって来たのだ？まさか、”アレ”がばれたのではあるまいな！？」

何やら思い当たる節があるのか、ゼルダは蒼白になる。

「”アレ”、とは？ニヴルヘイムやヘルで狩りをなさっておられることですか？そのことでしたら、公は認めておいでですし、”アスガルドに足を踏み入れるな”という約は違えていないのですから、問題はないでしょう」

仮に問題があったとしても、ゼルダの味方であるニヴルヘイム公が笑顔で揉み消さだろうとルーディは言う。

「否、グニパヘッリルの洞窟にある”歪みの穴”^{ワームホール}を利用して、”中^ミつ国”^{ドガルド}にあそ……むぎゅっ」

「ゼルダ様、何処に耳があると知れませんか」

白魚のように美しいベルガの手が、ゼルダの口を塞ぐ。だが、ルーディにはゼルダが何を言わんとしたのかが理解出来たようだ。

「……ああ、”アレ”はまずいかもしれないですね。ベルトの力を使っていないから大丈夫だろうと思っていましたが、”ヘイムダル”に感知されていたのかな……？うーん、僕も共犯の一人に入りますよね？どうしようかなあ……」

「問題ありませんわ、ルーディ。ゼルダ様の好奇心によって引き起こされた事ですもの、罪は全てゼルダ様が引き受けてくださいますわ」

「うむ、僕に任せておくが良いぞ……って、おい！？僕だけが怒られるのか！？全部僕の責任になるのか！？」

ゼルダが慌てふためく様を眺めているベルガは、とても楽しそうに肩を揺らしている。

「こんな所で推測していても、答えは得られませぬ。クソ野郎に対面しないことには、ね」

「ベルガ、”クソ野郎”ではなく”使者殿”ですよ」

「ふふふ。アスガルドの連中なぞ、皆”クソ野郎”で宜しくてよ」
ルーディがそつと窺めると、ベルガは艶然とした冷笑を浮かべる。

（おお怖い怖い）

背筋に寒気が走り、ルーディは思わず肩を竦めた。

「んーむ、そろそろ向かうとするかの……」

漸く応接間に向かう決心が付いたのか、大きく伸びをしてから、ゼルダは其方に向かって歩き出した。その後続くベルガは、ルーディに会釈をした。

「御健闘を」

「うむ」

振り返る事はせずに、ゼルダはひらひらと手を振りながら、敵と屋敷の主が待つ応接間へと向かう。二人を見送り、一人その場に残ったルーディはふっと暗い笑みを浮かべた。

「可哀想になあ」

最終的には腕力に訴えるゼルダは面倒だし、妖艶な笑みを浮かべながら毒を吐くベルガは恐ろしい。だが、あの場所にはそれ以上に面倒で恐ろしい人物がいるのだ。

「心の傷スウリツにならないと良いけれど、あの人」

仮にそうだったとしても、自分の所為ではないので心はちっとも痛まないのだが。

ルーディは徐に踵を返すと、中庭へと出て行ったのだった。

皇帝の書状

「汝のような”出来損い”の顔なぞ見とうない」

話がある——そう聞いていたのだが、と心の内で嘆息する。

呼ばれた理由が分からず途方に暮れるしか出来ないでいた儂にかけられたのは、親が子にかける科白とは思ひ難い嫌忌の言葉であった。けれども、そのような言葉で儂が傷つく事はない。己に向けられる侮蔑、中傷、差別の言葉、態度には、ほとほと慣れきってしまったのだ。

無理もない、日常茶飯事なのだからな。

「余自らの手で殺めるのも億劫であるし、顔が見とうないというだけで殺めるのも如何かと思うてな。相手方には話についておる、汝にはニヴルヘイムでの軟禁を申し付ける。二度と再びアスガルドの地を踏めると思うことなく、虚ろな時を過ごすが良い」

要するに、自らの手を汚す事を厭うておられるのだろう？だからこそ、他人に儂を押し付けるのだ。

都合によつては死刑に変更可能な軟禁という名の終身刑を言い渡された儂はというと、嘆き悲しんだりする事はなく、寧ろ喜んでいた。息をするだけでも重苦しく居心地が悪い事この上ない碌でなしの宝库である万魔殿を去ることを許されたのだと思うと、自然と口元が緩んでしまつてはいないか。

「やれ、何故笑つておる。薄気味が悪い」

儂はどうやら無意識のうちに笑つてしまっていたらしい。

眼前の皇帝——フリードリヒ・ユリウス・カイザー・アルファズル

陛下は訝るように眉根を寄せ、儂と同じ色をした目を眇められた。軟禁を告げられたことで将来を夢み、泣き崩れる様を思い描いておられたのだろうか？

笑止な！

このような場所に居続ける事の方が人生に絶望しか抱けぬわ！近い将来気が触れてしまうに決まっておろう！

「失礼致しました」

とりあえず儂は緩んでいた頬を引き締め、頭を下げておいた。そして、心の内でほくそ笑んだ。

陛下には分かりますまい、儂の心を満たしておるのが喜びである事を。まあ、知られたくないがな。

儂はこの皇帝に期待なぞ抱きはせぬ。

『——助けてください、父上』

もがいてももがいても地獄から這い出ることが出来ず、救い出して欲しくて伸ばした手を撥ね退けられた”あの日”から、儂は貴方に何も期待せぬ、希望を抱きもせぬのだ。

「ニヴルヘイムへは、己が身一つで参れば宜しゅう御座いますか？」

許されるのであれば連れて行きたい者たちがいるので、儂は皇帝に尋ねてみる。こんな場所に、置いてゆきたくないのだ。

「何ぞ持っていきたい物でもあるのか？勝手に持っていけば良からう」

「ならば、アマルベルガ・マルクスとベルトラム・フォーゲルヴァイデを頂戴しとう御座います。我はそれらさえおれば、他に何もいりませぬ」

儂が二人の名を口に出した途端、皇帝は片眉を跳ね上げた。

「ならぬ」

皇帝は、儂の望みを却下した。恐らく却下されるだろうと踏んでいた儂は、焦ることなく次の言葉を紡ぎだしていた。

「何故で御座いましょうか？陛下は先程、勝手に持っていけば良いと仰ったではありませんか」

「……」

よりによって儂が所望したのが”曰くつきの二人”だったのだ、皇帝が洩るのも仕方がなからうて。だが、儂は決して退かぬ。

「陛下には”フレイ”がついておられるではありませんか。他の方々にも”癒し手”はついておられますよ。”出来損い”とはいえ、我も”アルファズル”、”癒し手”は必要不可欠で御座います」

最強と謳われる”アルファズル”ではあるが、実際は幾つか欠点が存在しているのだ。

その一つが、”病原菌に対する抵抗力が一切ない”ことである。それ故に有事の際には、どうしても”癒し手”——治癒能力を有する”ヴァン”の手助けが必要なのである。

”出来損い”である儂には、特定の”癒し手”が与えられてはいなかった。処罰を覚悟しているベルガが助けられなければ、儂はこ

の時まで生きてはこられなかったであろう。

「ヘイムダル”についても、”シグルドリーヴァ”がおりましよう。”ブリュンヒルドの忌み子”を守りの要に置いていては、危険なことこの上ないと思われませぬか？いつまた反旗を翻すやもしれませぬ」

”ヘイムダル”に与えるのは、ベルトでなければならぬという決まりはない。ベルトが一番”ヘイムダル”に馴染むというだけであつて、”スヴァルトアールヴ”であれば誰でも構わぬということを儂は知っておる。

それを教えてくれた者は、この男の手にかかつて命を落として久しい。

「出来損い”には、”半端者”と”忌み子”が似合いで御座いますしょう？」

連れて行くが良いと言え、この糞親父！

”フレイ”と”シグルドリーヴァ”が手許にあれば充分であろう。その二人を寄越せと言っているのではない、その二人に成り代われる者たちを寄越せと言っているだけだ。

儂の大切な”家族”を連れて行きたいだけだ、何が悪い！

「……好きにするが良い。汝が大人しく軟禁を受け入れるのであれば、マルクスとフォーゲルヴァイデは汝にくれてやる」

皇帝の鋭い碧眼が、儂を睨みつける。

不本意ではあるが認めてやる、有難く思えと言いたげであるな。何様であるか。ああ、皇帝陛下であるな。

「有難き幸せ」

感謝などはしていないが、一応は了承して貰ったのだから感謝している振りぐらいはしてやる。すると、皇帝は皇帝らしからぬ舌打ちをなさった。

「早う去れ、”出来損い”が」

「言われずとも、そう致しまする。御前を失礼致します、皇帝陛下」
清々しい気持ちで儂は皇帝に背を向けて、意気揚々とその場から立ち去った。

別れの言葉なぞ必要あるまい。恐らくあちらも目障りな”出来損い”を追い出せて清清しているであろうからな。

よし、これで心残り無くニヴルヘイムへと旅立てる。

待っておれ、ベルガ、ベルト。

今、儂が迎えにいつてやるからな。

だから、力一杯抱き締めておくれ。

白磁というよりも血色が悪い為に必然と青白い肌は、鮮やかな紅色の髪を目立たせている。どす黒い隈の上にあるエメラルドの双眸は、窓の外——ニヴルヘイムの曇天をじつと眺めているだけだ。

中年にさしかかったくらいの痩せこけた男——ニヴルヘイム、及びヘル公爵ヨハネス・ゲオルク・ファウストが応接間に現れ、面白味の無い常套句を並べ立てた挨拶を交わしてから数十分。

室内は、痛いほどの沈黙に包まれていた。

挨拶を終えてから、ヨハネスは一言も喋らないでいるのだ。

——嗚呼、居心地が悪い。

使者として”ある物”を携えてやって来た政務官ヘイエダールは、胃がギリギリと締めつけられるように痛むのに耐えていた。戦闘に長けた種族である”アース”にしては珍しく武官ではなく文官となった彼は、皇帝陛下のおわしますヴァルハラ宮に出仕するようになってからそれなりの年月を過ごしてきているのだが、各地を支配する領主とは面識は無かった。

とどのつまり、ヘイエダールは高官とはいっても中の中くらいの位置付けにいる人物なのであった。

よってヨハネスとは初対面となるわけなのだが、脳味噌が勝手に鬱々とした空気を纏う陰気なこの男を”苦手です、無理です”と決めつけてしまったらしく、普段なら難なく出来る他愛の無い会話が出来ないでいる。

そのようになってしまった一因には、アスガルドを出る前に上司や同僚らに吹き込まれたヨハネスに関する噂の所為でもあるが……。

「……二、ニヴルヘイム公」

沈黙に耐えられなくなったヘイエダールは勇気を振り絞り、上座の席に着いているヨハネスに声をかける。彼はゆっくりと、領地の空と同様にどんよりとして澱んだ目を動かした。

（怖い！何なんだ、この人！？上司命令が無かったら逃げたい……っ！）

その場から走って逃げたくなるが、未だ目的を果たしていないので何とか堪えた。

「この十数年、定例会議にお越し頂けないと耳にしたのですが……御体の調子が優れないのでしょうか？」

ニヴルヘイム公が病弱である、ということとは有名な話だ。

ヘイエダールとしては当たり障りがないと思われる話題を振ってみたわけだが、次の瞬間、ヨハネスは背筋も凍るような気味の悪い笑みを浮かべて、通りの悪い低い声でぼそと話し出した。

「そうですね、私は病弱ですのですね。アスガルドへと赴く途中で吐血して冥府^{ヘル}の住人になりかねないので、皇帝陛下には御容赦頂いておりますよ、ええ。代理の者が報告に行っておりますので、さしあたって問題はないと思うのですが、何か？」

文句があるなら四百字詰め原稿用紙三枚以内に起承転結を確りと踏まえた上で詳細に理由を書いて人事に提出してみる。出来るものならばな。

抑揚もなく一本調子で言い放つヨハネスに、ヘイエダールは頭が痛くなった。

無理だ。弾むような会話の種が全くもって浮かんでこない。そして

あちらもまた会話を弾ませようという気は微塵も無いようだ。

この状況は実に耐え難い、誰か助けてくれ！

切実にそう願った時、控えめなノックの音が耳朵に触れ、間もなく扉が開いた。ヘイエダールは光明が射したと喜んだのだが、それは新たな地獄の始まりだとは思ってもいなかった。

「ああ、殿下。御足労頂きまして、有難う御座います」

その声音はヘイエダールに向けられたものとは異なり、幾らかの優しさが滲んでいる。ヨハネスが立ち上がり来客を迎え入れているので、彼も席を立ち、其方へと目をやり……首を捻った。

——誰だ、この男は？

腰が隠れるほどに長いプラチナブロンドに意志の強そうな碧眼、そして黒く艶光る角と尻尾を持っているまでは合っているのだが、目的の人物とは性別が異なっている。

（第四皇女は実は男だったのか？）

事前に耳にしていた情報によれば、第四皇女は小柄な少女のような容貌をしているとあった。だが、眼前にいるのは皇女と同じ特徴を持つ”アルファズル”の青年だ。

脳内で自問自答を繰り返しているヘイエダールを余所に、上座を譲ろうとしたヨハネスを制し、謎の”アルファズル”は彼の真向かいの席に着いた。共にやって来た黒髪の美女は、彼の後ろにそっと控える。

「殿下。此方がアスガルドよりいらした、えーと、ヘイエダール？ 殿です」

名前合つてたつけ？

首を傾げながら、ヨハネスは”殿下”に彼を紹介する。

「御初に御目にかかります。ニヴルヘイム公より御紹介頂きました、政務官のヘイエダールと申します。以後、お見知りおきを……」

政務官の職に就いてから身に付けた行儀作法を遺憾無く発揮し、ヘイエダールは流れるような仕草で一礼をした。

「明日には綺麗に忘れる。まあ、面を上げよ、ヘタレとやら」

「ヘイエダールに御座います」

さり気なく失礼な事を言つてのけた第四皇女？の声は、見た目の通り、やはり男のものであった。

（ニヴルヘイム公が”殿下”と仰っているのだから、この御仁がグリゼルデイス殿下であることは間違いないのか……？）

礼儀を忘れ、不躰にもジロジロと検分してくるヘイエダールに、”殿下”は不愉快だとばかりに口を歪める。

「ヘタレよ」

「ヘイエダールに御座います」

彼は、”殿下”が自身の名を本気で覚える気が無いのだと悟った。

「儂が誰であるのか、理解しておらぬようだな？貴様が拝謁を許されたいと宣っていた、グリゼルデイス・クセーニア・アルファズル

であるぞ」

謎の”アルファズル”——男の姿をしたゼルダは、彼を嘲笑い、目を細める。

「貴様は存ぜぬのか？儂が”出来損いのアルファズル”と呼ばれること、そして女でもあり男でもあることを」

多種多様に姿を変えることが出来ると言われている”アルファズル”だが、性別までは変えることが出来ない。元が男である場合、女に見せることは出来ても”女そのもの”になることは出来ないのだが、ゼルダはそうではない。

女として生まれてきたが、不思議なことに”男そのもの”になることが出来るのだ。それ故に気味悪がられ、”出来損い”と蔑まされていた——ニヴルヘイムにやって来るまでは。

普段は本来の少女の姿をしているゼルダだが、時折このように男の姿をとることがある。それは相手に嘗められないようにする為だったり、そんな気分になったからなっただという理由だったりする。

「おやおや。ヴァルハラ勤めの政務官にくせに……ああ、殿下が此方に御出でになった後に入られたのですかね？だとしても、殿下の情報が手に入らないとは思いますがね。ということは、ヴァルハラの連中は殿下のことをすっかり忘れておられるようですね。いやはや、吃驚です。脳味噌腐ってるんですか？発酵してるんですか？糸ひいちやってるんですか？」

まるでゴミ虫でも見るかのような白眼をヨハネスから頂戴したヘイエダールは、一瞬で顔面蒼白し、素早く頭を下げた。

「大変申し訳ありません！無礼を働きましたことをお許しください、

何卒御容赦を……っ！」

何で重要なことを教えてくれなかったのだ、と、心の内でアスガルドにいる上司や同僚に恨み言を吐く。ヘイエダールは恐怖でガタガタと震えている。

「虞れずとも良いぞ。僕は軟禁されている身の上なのでな？貴様を罰する権限は持ち合わせておらなんだ。なあ、ハンス？」

この地を支配する支配者に目を向けてみれば、彼が愉快そうに唇の両端を吊り上げているのが見えた。

「殿下がソレに制裁を下したとしても、問題はありませんよ。何故かという、私が揉み消しちゃうからです。証拠隠滅は得意分野です。でお任せください、ふふふ……」

不気味な笑い声をたてているヨハネスは今、どのような手段を以てヘイエダールを物言わぬ死者にするか考えているに違いない。

（おお、ヘタレが凍りついておるな。流石はハンスよな）

”死にかけ公爵”は他者を不愉快にさせたり、からかうのが大好きなのだ。人はそれを迷惑行為と呼ぶが、この館の者たちは慣れきってしまっている為、誰も彼に注意をしない。注意をしたとしても言う事を全く聞かないことも知っている、無駄なことはいらないのだ。

（あたくしが口を出す必要はありませんわね。ゼルダ様も公も楽しそうにしていらっやいますこと）

発言することを許されているのであれば、是非とも参加させて頂きたいものだ。

ゼルダの背後に控えているベルガは、目の前で繰り広げられている”ハイエダール弄り”をそれはそれは楽しそうに眺めているのだった。

「ふむ、飽きたな。やれ、ヘタレ。本題に入ってやろう」

一頻りハイエダールを弄ったところで、ゼルダは思い出したかのように話を切り出した。早々に追い出してやろうと意気込んでいたことをすっかり忘れていたらしい。

「出来損い」のことなぞ忘れておられるだろうと思うていたのだが、今更に使者なぞを寄越しなさるとは……皇帝陛下は余程に重大な要件がおりのような？」

そうでなければ使者を寄越すはずがない。大した用事でないのであれば、ヨハネス経由でヨハネスの脚色つきで伝わってくるはずだ。螺鈿細工の施された美しい卓の上に肘をつき、ゼルダは胡乱気なハイエダールを見やった。

「こ、皇帝陛下より皇女殿下宛の書状を預かって参りました」

やつと目的が果たせる！

ハイエダールは泣きそうな顔をして胸を撫で下ろすと、懷から封書を取り出した。それはベルガを経由して、ゼルダへ渡される。力の強いゼルダは破らないように気を付けながら封を開け、中に入っていた書状を広るとざっと目を通した。

すると眉根を寄せ、忌々しげに舌打ちをしたのだった。

「如何されましたか、殿下？」

書状を睨みつけるゼルダに、ヨハネスが素っ気無く声をかける。

「軟禁は解く、アスガルドへ戻って来い、だそうだ」

「おやまあ」

「汝も来やれ、と書かれておるぞ」

「おお、酷い。あの碌でなし陛下は私に冥府の住人になれと仰るのですね」

不敬罪に問われかねない発言をしたヨハネスがおどけて肩を竦めると、今まで脅えているだけであつたヘイエダールが非難めいた視線を彼に寄越してきた。

「此方には、”スヴァルトアールヴ”がおりませんでしたか？」

第四皇女の近衛に、該当者がいたと記憶している。”スヴァルトアールヴ”がいるのであれば、彼らが持つ能力を利用して、長旅をすることなくアスガルドを訪れる事が出来るのだ。

「”ブリュンヒルドの忌み子”のことですかね？彼ならいますけどね、私はアスガルドに行きたくないのですよ。御日様の光が眩しすぎて目が潰れそうになるし、直ぐに貧血を起こすし。御存知の通り、私は病弱で序でにニヴルヘイムの住人”ニーベルンク”ですのでね」

暗くてじめつとした場所が好きなんです、文句がありますか？
ヨハネスは拗ねたような表情を浮かべると、ぷいと顔を背け、ぼそ

りと呟いた。

「殿下のみならず私にまで招集をかけるということは、”ミール
の首”が”神々の運命”を告げたのでしょねえ」^{ラグナレク}

独り言のようなその科白に、ヘイエダールがピクリと反応するのを、ヨハネスは見逃さなかった。

「ふふふ、ビンゴ、ですねえ」

してやつたりといった顔のヨハネス、そして青ざめて硬直しているヘイエダールを見比べて、ゼルダはやれやれと嘆息する。

「帰還せよとの命の真意はそれであるか。”首”め、余計な事を抜かしおつてからに……」

”ミールの首”とは、皇帝のみが訪れることを許されている”智慧の泉”に安置されている巨人の首のことをいう。特殊な処置を施されており、決して腐ることも死することもないその首は様々な知識を授けてくれる不可思議な存在であり、皇帝に代々受け継がれている所有物でもあった。

此方が問いかけると内容に見合った回答を返すだけの”首”は、稀に自ら進んで口を利くことがある。

——”神々の運命”の時が訪れる。

”首”がこう告げたのであれば、それは帝国を統べる皇帝が代替わりするであろうことを意味する。古の頃より続く不変の金科玉条である。

「あー、七面倒臭いことが起こってくれやがりましたねー」

”ミームルの首”の宣告は、帝位継承権を持つ皇族による玉座の篡奪をかけた戦いが始まる合図である。勝敗の決め手は相手の息の緒を絶つこと、つまりは身内で血を血で洗う殺し合いをするのが帝位継承の――”神々の運命”の戦いの掟だ。

その戦には、各地を治める公爵らにも参加権が与えられている。屈強な”アルファズル”や諸公爵を討ち取り、最後に皇帝の首を落とせば”アルファズル”による治世は終焉を迎える。だが、今までそれを成し遂げた者は存在していないのだった。

ニヴルヘイム、そしてヘルをこよなく愛するヨハネスは玉座には一切の興味を持たない。”神々の運命”の戦いへの参加権など、彼にとっては邪魔以外の何ものでもなかったのだった。

（ふん、あの糞親父は血を分けた誰か、或いはハンスと同じ公爵位を持つ誰かに討ち取られるのか。だが、そのようなことよりも……）

ゼルダの心にどす黒く醜い感情が渦巻き、皇帝に対する怒りがふつふつと湧き上がってくるのを感じる。

（儂がニヴルヘイムに閉じ込められるのであれば、ベルガとベルトはくれてやると、そう言うたではないか……！）

ヘイエダールが携えてきた皇帝の書状には、二人の処遇についての記述はなかった。だが、ゼルダの軟禁が解かれるということは畢竟五十年前に交わした取り引きが反故にされたも同然ではないかと勘繰ってしまう。

次の瞬間、溜まりに溜まった皇帝への不満が爆発し、目の前が真っ赤に染まる。つまり、いきなりぷつつんしたのだ。

「巫山戯るなっ！！！」

怒髪衝天の勢いに任せて卓に拳を叩きつけると、硬く重量のある材質の木で作られている卓は与えられた衝撃に耐えられず呆気なく壊れ、どうと音を立てて崩れ落ちた。卓上に置かれていたティーカップすらもそれに巻き込まれ、冷めきった中身をぶちまけながら床に落ち、派手に割れた。

（あ、うちの高級家具が……ま、いつか）

ヴァナヘイム製の卓を破壊されたヨハネスは憤る事もなく、暢気に残骸を眺めている。その手には、ちゃっかりと死守していたお気に入りのコーヒークップがあった。

「のっけから撤回する心算であつたのだろうな！」出来損い”との約を反故にするなど、彼奴には屁でもないであろう！信じた儂が愚かであつたわ！！」

衝動的に叩き壊した卓の残骸を素手で掴み、丸腰のヘイエダールに投げつけていく。

「ひい……っ！」

自身が”アース”であることが幸いし、彼は生まれ持った反射神経の良さで略ゼロ距離射撃ともいえるゼルダの攻撃を神懸りの的に避けていく。

その代わりに、彼の背後にある壁に次々と風穴が開いていった。幸い隣室には誰もおらず人的被害は免れたが、家具や床などは相当な被害を受けた。

「殿下。八つ当たりでソレを殺っちゃうのは一向に構わないのですかね」

「構ってください!!!」

「屋敷を破壊するのは頂けませんな。その机、お気に入りだったのですがねえ？」

ヘイエダールの悲痛な叫びは無視して、ヨハネスはやりわりとゼルダを咎めた。

「エリーゼを伴い再び買いに行けば良からう」

エリーゼとはヨハネスの細君の名である。問題だらけのヨハネスの手綱を握る事が出来る唯一の人物をして知られている。

「ああ、それもそうですね」

「そういう問題ではない!!!」

デートなんて半年振りじゃないかしら、と物思いに耽ろうとしたヨハネスの意識をヘイエダールの怒号が現実に取り戻す。水を差された彼は、ヘイエダールに白眼を向けた。

「貴方がたは、陛下の名代である私を何だと思っておられるのか！私を害するということは、帝国に牙を剥いたも同然の所業、命を奪うなど以てのほか！そのようなことをするのに、何の躊躇いもないのですか!？」

遂に堪忍袋の緒が切れたらしいヘイエダールは、顔を真っ赤にして

喚きたてる。使者らしい扱いを受けなかったことに酷く憤慨しているようだ。

「躊躇う、だと？何故に、儂が貴様を、皇帝の犬を敬わねばならぬのだ？」

その声音は静かであったが、憤慨するヘイエダールを冷静にさせる威圧感を伴っていた。

「日々大した理由もなく蔑まれ、時には気紛れに殴られ、悉く人権を無視されて生きてきた儂が、そうなった原因の一つとも言える皇帝に怨嗟の念を抱かずに、寧ろ敬うだと？笑止！！！」

素早く伸びたゼルダの手が、ヘイエダールの首を捉える。太くもなく細くもない首は、鋭い爪が食い込むほどの力でぎりぎり締め上げられる。

「糞皇帝に媚び諂う犬に、儂の腑は理解出来まい。針の筵から解放された時分の歓喜、貴様なぞには決して理解出来まい！！！」

ゼルダはそのまま彼の身体を軽々と片手で持ち上げると、血走った目を眇め、歪んだ笑みを浮かべた。

ぶつつん、反省、決意

狂気混じりの歪んだ笑みを浮かべたゼルダは、ハイエダールの首を掴む手に一層力を籠めて絞め上げる。彼の首の骨は、みしみしと嫌な音を立てた。

「う……ぐう……っ」

ハイエダールはどうかしてゼルダの魔の手から逃れようと、じたばたと手足を動かして抵抗するが如何に戦闘に長けた種族である”アース”であろうとも、外見によらず強靱な筋力を有する”アルファズル”には到底敵わない。どれほど抗おうとも、ゼルダの腕はびくともしないのだ。

「殿下……！」

主の暴拳を制止しようと、ベルガはゼルダの腕にしがみつく。

「……離せ、ベルガ。邪魔立てするとあれば、如何に汝であろうと容赦はせぬぞ」

完全に頭に血が上ってしまっているゼルダは、冷静な判断が下せなくなっている。彼はベルガに冷眼を向け、そう言い捨てた。

「何事ですか!？」

騒ぎを聞きつけてやって来たのか、幾つもの風穴が開いた隣室からベルトとルーディ、幾人かの使用人が現れる。

「ゼ……殿下!？」

客人を縊り殺そうとしているゼルダと、腕にしがみついて必死に止めようとしているベルガの姿を見たルーディは思わず叫んでいた。

「ベルガ、殿下から離れろ」

前へ一歩進み出たベルトが静かに告げる。ベルガがそれに従って急いでゼルダから離れると、突如彼の身体はふわりと宙に浮いたのだった。

「……っ!？」

ベルトが”スヴァルトアールヴ”の力でもって、ゼルダの周囲を限定的に無重力空間に変化させたようだ。急にヘイエダールの体重を感じなくなったことに驚いた彼が思わず首から手を離した刹那、空中に空間の歪みが生じて出来上がった”門”が現れ、その向こう側から腕が伸びてきてヘイエダールの身体を回収して消えていった。

その場から動くことなくゼルダから得物を奪い取ったベルトは、咳き込んでいるヘイエダールを使用人たちに預けると、無重力空間を解除する。

「……ベルトおっ!!！」

難無く空中から床に着地すると、ゼルダは血走った目でベルトを睨みつける。標的をヘイエダールからベルトに変更した忘我状態のゼルダが彼に襲いかかろうとした瞬間、首筋に何かが突き刺さったような痛みを感じ、足を止めた。

首に突き刺さったものを手に取ってみると、それは長い針だった。

「殿下、おいたは感心しませんね？」

通りの悪い声の主——ヨハネスの手には、何処からか取り出したのか、吹き矢用の細長い筒が握られている。彼がゼルダの首に針を突き刺した犯人であると分かった。

「ハンス！ 汝、は……っ!？」

ぐるりと目に映る景色が回転し、強烈な眠気が襲ってくる。あの長針の先端には、薬が塗りつけられていたようだ。

「ふむ？ 即効性ではなくとも、”アルファズル”である殿下にはよく効くようですね？」

病原菌に耐性のないアルファズルは、体内に薬の成分が入ると直ぐに効果が現れてしまうのだ。「因みにこれはルーくん印の強力なやつですのでね」とヨハネスが付け加えたのが聞こえたが、ゼルダの意識はそこで途絶えた。

力を失ったからだが膝から頽れるが、寸でのところでベルトが抱きとめる。

「ベルちゃん、殿下を御部屋へ。恐らく殿下には強すぎる薬ですので、解毒を御願いますね？ ベルくんは此処に残ってもらえますかね？」

「畏まりましたわ、公爵様」

「畏まりました」

ベルトにゼルダの部屋へと空間を繋いでもらい、使用人たちが用意した担架に眠るゼルダを乗せてベルガは去っていく。

「……ニヴルヘイム公、そのような物をお持ちならば、もっと早くに使っては頂けませんか!？」

漸く呼吸が整ったらしいヘイエダールが、非難の声を上げた。目線を彼の首に向けてみると、ゼルダの手形が赤い痣となってくっきりと残っており、ゼルダが本気で殺そうとしていたことが見てとれる。吼えるヘイエダールに渋々目を向けたヨハネスは、おどけたように肩を竦めてみせた。

「はてさて。何故に、私が君を助けなければならぬのでしょうかね？」

真面目な面持ちで呟くと、ヘイエダールは面食らった。

ゼルダに手を汚させまいとあのような真似をしただけなのであって、ヨハネスにはヘイエダールを助ける気など微塵もなかったのだ。結果として、そのようになっただけだ。

「君が殿下の地雷を踏んだからこそ、あのような目に遭っただけですのですね? 自業自得、だと思つのですがね?」

「……貴方は、私を何だと思つているのですか!？ 私は、陛下の書状を預かつてやって来た使者なのですよ!？」

不当な扱いを受けるのは侵害であると、ヘイエダールは尚も吼えた。

「それが何か? 私に君が何者であろうがどうでも良いのですがね?」

どんよりと澱んだエメラルドの双眸に、極寒のヘルを髭髯とさせるような冷気が宿る。それは応接間の温度が一気に下がったのではと錯覚するほどのものだった。

「ろくでなし陛下の使者なぞくそくらえ、ですがね？私は陛下が嫌いでしてね、そしてそのことは周知の事実ですのね？陛下も好きにしろと宣っておられますので、私は憚ることなく御本人の目の前で罵詈雑言を吐く許可を頂いている訳でしてね？」

ヨハネスの気迫に恐れをなし、ガチガチと歯を鳴らして震えだしたヘイエダールに近付いて顔を覗きこむと、彼はにやりと笑った。

「先程君が言ったように私も言わせて頂きましょうかね？……ニヴルヘイムとヘルを統べる私を誰だと思っている？」

「ひ……っ！」

ヘイエダールは情けない悲鳴を漏らし、腰を抜かして、その場に尻餅をついた。その姿はあまりにも惨めだ。

「さて、虎の威を借る狐には御退場願いましようかね？その面^{つら}を見ているのにも飽きましたのね？ベルくん、”いつもの場所”に送って差し上げてくれませんか？」

「畏まりました、公爵閣下」

命を下されたベルトは、恭しく一礼をする。

「このような場所まで御足労頂きまして、誠に有難う御座いました……冀陛下の使者のヘイエダールくん」

「え、ひ、ひい……っ!？」

ヘイエダールの周囲の空間が歪み、彼の身体は徐々に飲み込まれていく。やがて彼の身体は、悲鳴と共に跡形もなく消え去ったのだった。

ヘイエダールを”いつもの場所”へ送った後、ヨハネスはやれやれと言いながら首を振った。

「……ヨハネス様」

ルーデイが声をかけるが、ヨハネスは反応を示さない。気に障るような真似をした覚えはないのだが。

「……無視ですか、ヨハネス様？」

溜め息混じりに呟くと、どんよりとした緑瞳がぎょろりと動き、ルーデイを捉える。その様は気味悪く、付き合いの長い彼でさえも思わすたじろいだ。

「……ピー」

「……はい？何ですか？」

ぼそりと通りの悪い声で呟かれたので、上手く聞き取れなかったルーディは小首を傾げた。一方、目と耳の良いベルトは確りと聞き取れてしまったのか、表情を変えずにただ目を明後日の方向に向けた。

「パピー、と呼んでくれなければ返事はしません。と、私は以前に君に言いませんでしたかね？」

「……」

成程、それで返事をしなかったのか。

確かにそう言われているのだが、その呼び名にどうしようもなく抵抗のあるルーディは”ヨハネス様”、若しくは”公爵閣下”と呼びたい。然し、眼前の人物の捻れ曲がった性根を嫌というほど知っている彼は、ここで折れないと埒が明かないこともよく知っている。

——頭が痛い。

彼は、覚悟を決めた。

「……パ、パピー……」

彼は、消え入りそうな声で呟いた。その顔は同情を誘うほど引き攣っており、側にいるベルトは彼の内情を思っただけ、慰めるかのように彼の肩に手を置いた。

「はい。どうかしましたかね、”未来の娘婿”^{むすい}のルーくん？」

満足気に不気味に微笑むヨハネスに呆れたルーディは、がつくりと肩を落とすが、短く息を吐くと気持ちを切り替えた。

「あの使者殿ですが、ベルトに何処に送らせたのですか？」

「おや、気になりますかね？」

「ベルトに訊いても良いのですが、彼は非常に真面目なので、パピィが箝口令を布けば決して答えてくれないでしょうから。命を下したパ、パピィ、に尋ねた方が良いと考えました」

抵抗のある”パピィ”を二連続で使って貰えたことに気を良くしたらしいヨハネスは、にんまりと目を細める。

「そうですね、更にルーくんはどう考えますかね？」

質問には、質問で返された。

（……そうくるのか）

質問に質問で返されたルーディはこめかみに指を当てて、考え込む。理由は分からないがゼルダと同じようにアスガルドの住人が嫌いらしいヨハネスが、そう易々とハイエダールをアスガルドに返してやるとは考え難い。ふと、何となく懐から懐中時計を取り出した彼は現在の時刻を確認した。時計の針は、午後3時過ぎを指し示している。

その時、彼の脳裏に一つの可能性が思い浮かんだ。野生の勘と言っても良い。

「まさかとは思いますが、ガラムのところですか？」

「ふむ、流石はルーくんですね。暗示なしで、よく分かりましたね？」

「……有難う御座います」

正解したのは良いが、何故だか嬉しくはなかった。

ガルムとは、ニヴルヘイムとヘルの境にあるグニパヘッリルの洞窟を守る巨狼の名だ。ヨハネスが所有しているその番犬は、洞窟に入ろうとする侵入者を容赦なく食い殺す——と噂されているが、実際のガルムは人懐っこく、比較的大人しいのだった。

だが、何事にも例外はある。

腹を空かせたガルムは、狼の本能が目覚めるのか、噂通りの行動を取るのだ。

ヨハネスは、ヘイエダールをガルムの餌にするつもりか。

「腹を空かせたガルムから全力で逃げ、氷のように冷たいギョツル川を死ぬ気で泳いで渡り、アスガルドまで走る……或いは歩いて帰る遠足が楽しめますね？」

さも愉快気に、ヨハネスの唇が吊り上る。

「……」アース”ならばガルムから逃げ切れるやもしれませんが、そうならなかった場合は如何なされる御心算ですか？」

それは遠足ではなく、嫌がらせ、或いは死刑宣告と言うのではないかと突っ込みを入れたいのを我慢して、ルーディはヨハネスに尋ねる。如何に公爵といえど、処刑に近い真似をしても許されるものではない。

「それは勿論、証拠隠滅するだけですがね？」

「……御叱りを受けませんか？皇帝陛下や、他の方々に」

相手は仮にも皇帝が寄越した使者なのだから、ただで済むとは思えない。ルーディは、ヨハネスを心配して言っているのだ。

「さあ、どうなのでしょうね？不思議と怒られたことがないのですがね、ゼル様や、愛しのエリちゃんと愛娘のマーちゃんや”未来の娘婿”のルーくん以外に」

御蔭様でやりたい放題させて頂いておりますが、何か問題でも？これ以上は無用を言わせないと告げてくる視線に、ルーディは身震いした。本能が、危険を知らせているのが分かる。

”死にかけ公爵”に下手に逆らうべからず、を思い出したルーディは、ごくり、と喉を鳴らした。

「さてさて？それでは、そろそろ殿下の様子でも窺いに行きましようかね？」

「「畏まりました」」

ゼルダの存在を思い出したヨハネスがベルトに目で合図を送ると、彼は空間を歪めて、ゼルダの部屋へと続く”門”を作り出した。ヨハネスはその向こう側へと姿を消し、二人もその後続いたのだった。

ゼルダの私室は、現在の彼の心情を表しているのかのように散らかっている。

天蓋つきの大きなベッドの上には、目を覚ましたゼルダが仏頂面で胡坐をかいており、その側ではベルガが静かに控えていた。

「ゼル様、落ち着かれましたかね？」

他人がいない時、ヨハネスはゼルダを”殿下”とは呼ばず、親しみを籠めてこう呼ぶ。彼が歩み寄るとゼルダは眇めた碧眼で一瞥し、即座に顔を背けて無視をした。

「ふむふむ。落ち着かれておられているようですね？」

我が身をつつ走る”死にかけ公爵”は、ゼルダの反応を気にすることもなく、ベルガに勧められ、椅子に腰をかける。

「……何用であるか、ハンス。説教でもしに来たのか？」

唇の両端を吊り上げたまま此方を眺めているだけで、彼は一向に口を開かない。長い沈黙に耐えられなくなったゼルダは痺れを切らし、逸らしていた碧眼を其方に向けて、じろりと睨みつけてやる。

「説教をするつもりは毛頭ありませんがね？ゼル様がヘタレくん――使者であるハイエダール氏になさったことは、立派な八つ当たりで、ただの暴力ですのですね？ベルちゃんたちが貴方様を止めたのは至極当然のことで、それを咎めるのは……間違いですのですね？」

怒鳴りつけるようなことはせず、ヨハネスは冷淡な調子で諫言を呈した。

「……………悪かった。後ほど、謝罪をする。ベルガたちも……………すまなんだ」

ハイエダールがゼルダの地雷を踏んだのだとしても、殺そうとするのは頂けない。確かにあれはやりすぎだったと、ゼルダは少し反省する。

ベルガたちに顔を向けて詫びると、彼らは首を横に振った。

「ああ、ヘタレくんには謝罪なさらなくても結構ですのですね？それと、彼は既に此処にいないので無意味ですしね？」

「……………何だと？」

予想外の科白にゼルダは瞠目し、眉根を寄せた。

「ゼル様の容量の少なすぎる脳味噌では既に消去されているのかもしれないませんが、ゼル様がぶつつんする前に、私はゼル様に申し上げておりませんでしたかね？」

「さりげなく儂を愚弄しておるな、汝は。……………まあ、良い。して、汝は何を申しておったか？」

何を言われたのか思い出せず、ゼルダは腕を組んで首を傾げる。

「八つ当たりでソレを殺っちゃうのは一向に構わないのですがね、と申し上げました」

応接間の卓を叩き壊し、残骸をヘイエダールに投げつけまくったあたりで、確かにヨハネスは言っていた。

「それに彼はゼル様の怒りを買う発言をしたのですから、あのような報いを受けても仕方がないのでは？とはいえ、保護者である私の前でゼル様に殺人罪を犯されるのは困りますので、吹き矢を利用して一服盛らせて頂きましたがね。私自身が手を下すのは問題ありませんが、ゼル様がおやりになられてしまうと、監督不行届きで呼びがかかってしまいますのでね、裁判所辺りに？」

「……左様であるか」

「……ゼル様は今少し、感情を制御する術を覚えられた方が宜しいですね。我々の前では素直で御馬鹿で残念なゼル様で結構なのですが、敵前では、ねえ？」

本人を目の前にして散々なことを言つてのけるヨハネスは、いつそ清々しい——腹立たしい事も多々あるが。怒る気も反省する気も失せたゼルダは、深々と溜め息を吐いた。

「質問があるのですが、宜しいですか？」

話が一区切りついたところで、ルーディが口を開く。

「何であるか、ルーディ？申してみよ」

「有難う御座います。……ゼルダ様は何が原因で激昂なされたのですか？」

応接間に途中入場してきたルーディとベルトは、事情が把握出来ない。

「ああ、それはですね。”ミールラグナレクの首”が”神々の運命”の時に訪れると告げたようですね？皇帝陛下が態々書状を寄越してくださいまして、ゼル様にアスガルドへ帰還せよ、と書かれていたのですよ。御自分で追い出しておいて、帰って来いなどと仰るとは、陛下は随分と都合の宜しい御方ですよ。序でに私にも来るようにと仰せだそうでしたね」

ニヴルヘイムとヘルを統べる公爵であるヨハネスは、皇帝の玉座を巡る争いに参加する権利があるのだから当然と言えば当然だ。だが、玉座にまるで興味のない彼は呼び出されたことが相当気に入らないらしい。

「あのろくでなし皇帝は、”死にかけ公爵”にアスガルドの陽光を浴びて死ね、と仰りたいのですかね？嗚呼、嫌だ嫌だ……」

人差し指を立てメトロノームのように左右に振りながら、ヨハネスは不敬罪も恐れずに愚痴をこぼす。常に曇り空の元で暮らす”ニールンク”は太陽の光が少し苦手なのだが、その程度で死ぬ事は決してない。精々立ち眩みを起こす程度なのだが、ヨハネスは余程アスガルドへ行きたくないようだ。

「そう、ですか……」

ルーディは沈痛な面持ちで彼らを見つめると、それ以上は何も言わずに俯いた。ゼルダらがニヴルヘイムへとやって来る前に置かれていた環境をヨハネスから聞いていたルーディは、否応なしに戻らざるを得なくなつた彼らを心配してくれているのだろう。

「ルーくん、私のことは全然全くちつとも微塵も心配してくれていませんね？」

”未来の娘婿（予定）”の心を読んだのか、”未来の舅（予定）”は唇を尖らせる。

「あ、すみません。ヨハ……パ、パピー……は図太いので大丈夫だろうと……」

「……」

そのように思われていたとは知らなんだ。

事実を知らされたヨハネスはその衝撃の大きさに俄かに呆然とした後、話題を変えた。

「ところでゼル様。陛下の書状には、ベルちゃんたちの処遇については何か書かれていましたかね？」

ヨハネスの目が、彼が頑なに握り締めているクシャクシャになってしまった紙屑を捉える。

「……否、二人については何も書かれてはおらなんだ……」

「ほほう、では、ゼル様は早とちりをなさつた訳ですね？」

「……五月蠅い」

図星をさされたゼルダは、気まずそうに顔を背けた。

「ふむ。二人の自由は未だ継続中である、と考えても宜しいのではないですかね？幸い、二人を拘束しに来やがりもしないようですね。まあ、所詮は私の推測に過ぎませんので、どう御考えになるのか、そこらへんは我が君の御心のままに」

「……汝は何を申したいのだ、ハンス？」

彼の言わんとすることの意味がいまいち解せず、ゼルダは苛立ちを顕わにし、胡乱気な目をヨハネスに向ける。どうやら、短気なのはゼルダの性分のようなのだ。

「何も考えずに取りあえず行動を起こしてみても如何でしょうかね？無計画なのは、ゼル様の得意分野ではありませんかね？」

「……ハンスよ、それは誉めておるのか？それとも、ここぞとばかりに貶しておるのか？……まあ、良いわ。そうさな、行くだけ行ってみるとするか？」

と言ってみるものの、内心では「誰が行くか、あの伏魔殿なぞに」と呟いている。

——さて、困ったな？

気持ちを切り替えるにはどうしたら良いのかとゼルダが嘆息すると、ヨハネスは徐に席を立った。

「何時までにはヴァルハラ宮に到着している、との指定はありませんでしたので、ゼル様なりに考えられるのも良いのではないですかね？私は暫く留守にする旨をエリちゃんたちに伝えに行きますので、これで失礼致します。また、夕食の折に話し合いましうかね？」

「……うむ」

ヨハネスはゼルダに向けて恭しく一礼し、のんびりといった調子で彼の部屋から退出していったのだった。

残されたゼルダは俯き僅かに逡巡した後、ゆっくりと面を上げる。

「……考えたきことがあるゆえ、済まぬが独りにしてくれないか」

三人はゼルダの願いを聞き入れ、静かに退出していった。彼らの背を見送ると、青年の姿から少女の姿に戻ったゼルダはベッドの上に仰向けに転がる。

呆けたように暫くの間天蓋を眺めて、徐に目を閉じた。

（あの糞親父に見えねば、我らの明日は不明瞭なままであろうな……）

碌な思い出のないアスガルドへ戻るのは、正直に言って気が進まない。だが、皇帝の勅命であるので逆らうことは決して出来ない。

けれど、そのこと以上に恐ろしいのは、ベルガたちと引き離されるかもしれないことだ。

あの場所に独りで居続ける勇氣と自信は、ゼルダにはない。

若しも彼女らと引き離されるのだとしたら、彼女らはどうなってしまうのだろうか？

（……恐らくベルトは再び、“ヘイムダル”に繋がれるのやもしれぬな）

ゼルダが彼を解放するまで、彼の常はそうだった。

優れた空間把握能力と索敵能力を持つ数多の“スヴァルトアールヴ”を犠牲にして生み出された、索敵と監視を目的とした呪術装置――“ヘイムダル”。アスガルドの防衛の要といえるそれは、犠牲となった者たちと同じ“スヴァルトアールヴ”にしか扱うことが出来ない代物だ。

現在“ヘイムダル”に縛り付けられているのは“シグルドリーヴァ”と呼ばれる女性だが、彼女よりもベルトの方がそれと相性が良いことをヴァルハラ宮に巢食う連中は知っている。

“ヘイムダル”に縛り付けられた生贄に、自我は必要ない。装置に同調し、使命を果たす道具と化すのみ。故に、“ブリュンヒルドの忌み子”と呼ばれる不穏分子であるベルトを幽閉し、監視するにはうってつけという訳だ。

ベルトに反乱を起こす意思がなかつとも、関係ない。連中はベルトを最高の生贄としてしか考えていないのだ。

(……ベルガは、どうなる?)

豊饒を齎すと謳われる”ヴァン”と、夜の眷属と謳われる”デック
アールヴ”の混血であるベルガ。

”デックアールヴ”の容姿と”ヴァン”の証である癒しの力を持つ
彼女は、”出来損い”と蔑まれてきたゼルダと同様に”半端者”と
罵られて育った。

ベルガは幸運か不運か、アルファズルの癒し手の筆頭である”フレ
イ”と同等の力を有しており、これ以上同胞をアルファズルに奪わ
れたくないと考えた者たちによってヴァルハラ宮へと送られ、筆舌
し難い扱いを受けていた。
そんな彼女にゼルダが出会えたのは、奇跡にも近い偶然だったのだ
ろう。

ゼルダは大切な二人を失うことを、再び地獄に戻すことを望まない。
以前は自身を取り引きの材料にすることが出来たが、今後はそれが
通用するのかわからない。

「……やはり、若しもの場合は養親父を弑し奉り、帝位を篡奪する
ほかないか?」

ニヴルヘイムでの軟禁生活は、ゼルダにとって幸せを齎してくれた。
侮蔑の言葉と視線から解放され、”出来損い”ではなく”アルファ
ズルのグリゼルデイス”として扱ってもらえることが、何よりも嬉
しかったのだ。

——だが、この日々も間もなく終わりを迎える。

再び得る為には、望みをしなかった皇帝の玉座を手に入れる必要が
ありそうだとゼルダは考えた。

父である皇帝の首を狙う他に、立ちはだかるであろう異腹の兄弟けいていど
もや諸公爵を討ちとらねばならない。場合によっては、長年世話に

なつた恩人のヨハネスを手にかける破目になるだろう。

「……兎にも角にも、様々な事柄を把握せねばならぬな。考えるのは、伏魔殿に赴き冀親父の面を拝んでからであるな」

計画を立てて行動するのは、苦手だ。ならば、何も考えずに行動してから考えたら良いではないか。

(……そのようにしようかと言ったにも拘らず、儂は悩んだな)

先程ヨハネスに言われて、そのようにすると言ったことを思い出す。

「首を洗って待っておれよ、フリードリヒ・ユリウス・カイザー・アルファズル」

皇帝の言葉次第で、ゼルダは大人しくするのか、反旗を翻すのかを決めるのだ。

何が待ち構えているのか分からないからと恐れていては、先へは進めない。

今までそうだったではないか。

自らが動かなければ状況は何時までも変わることはないとゼルダは身を以て知っている。そのようにして、ここまでやってきたのだから。

旅立ち

普段通りの夕餉の時刻。

魔力灯^{ラング}の灯りはあれど仄かに暗い食堂で、ゼルダはヨハネスの細君と共に食事と会話を楽しんでいた。

「ゼルダ様は御帰りになれてしまいますのね……エリーゼは大変寂しゅう御座います。ゼルダ様御一人で娘と息子が増えた気分が味わえて、楽しゅう御座いましたわ。ベルガとベルトも良い子たちで……」

エリーゼ——エリザベータ・ファウストは、色味の濃い金髪とニヴルヘイムの空のような灰色の目を持つ健康的な美を持つ女性で、夫君である”死にかけ公爵”とは対照的だ。突然やって来た厄介な居候たちに嫌な顔一つせず、寧ろ此方が心配になるほど猫可愛がりしてくれたエリーゼがゼルダは大好きだ。ベルガたち以外の者にそのようにして貰えたのがとても嬉しかったことを、今でも鮮明に覚えている。

「おお、ハンス」

半時ほど経過した頃、執務を終えたヨハネスがやって来た。彼はゼルダの対面、エリーゼの隣の席に腰を下ろす。

「御機嫌ですね、ゼル様？」

目の前に出された少な目の前菜を眺めながら、ヨハネスはぼそりと呟いた。心なしか疲れの見える緑瞳を動かして、嫌いだったり苦手だったりする食材が入っていないかどうかを調べているようだ。

「うむ。今しがたエリーゼと話しておったのだ、明日の夕刻に行く予定であつた”軟禁生活五十周年記念パーティー”を”伏魔殿への御帰り御愁傷様パーティー”に変更し、盛り上がるうではないかな」

仮にも皇女という身分にあるので、ゼルダの身体には食事テーブルマナーの作法が確りと染み付いている。食事の所作は気品があり美しいのだが、その周囲は些か騒がしい。というのも、ゼルダは食事の量が尋常ではない為、ゼルダの世話をする女給メイドが追加の料理を運んだり、空になった皿を片付けたりと忙しく動いているからだ。見慣れている光景である為、ヨハネスはその様子を気にすることはなく楽しみに目を細めた。

「ほほう、パーティーは結決行されるのですね？」

「パーティーでもして盛り上がりねば、色々とやる気が起きぬではないか。明日の為にと、折角猪を狩つてきたのだぞ、腹一杯食うてやらねば気が済まぬわ」

皇帝の書状にはアスガルドへ帰還せよとは書かれていたが、今すぐ飛んで帰って来い、何時何時までには帰って来いといった時間の指定までは書かれてはいなかったとゼルダは主張する。

「多少なり待たせたとしても、罰は当たるまいよ」

鼻で笑い、彼女は何度目か分からないおかわりに食らいつく。

「……エリちゃん」

「あ？」

夫君の呼びかけに、エリーゼは目を眇めて眉根を寄せた。

ヨハネスは懷から手帳と万年筆を取り出し、さらさらと何やら書き始める。そしてそれをゼルダには見えないように、細君に見せた。

ひそひそと小声で話しても良いのだが、この距離では耳の良いゼルダには筒抜けだと知っているヨハネスは態々筆談を持ちかけたのだった。

——ゼル様はどうかなさっておいでなのですかね？

てつきり落ち込んでいるものだとばかり思っていたらしいヨハネスは、あっけらかんとしているゼルダの様子に驚いているらしい。

エリーゼは夫君から道具を受け取り、返答を書き記してそれを返した。

——テメエの中で決心がついたんだろうよ。取りあえず、アタシは何も訊いてねえぜ？

先程までの淑女振りとは縁遠い文章だ。

ゼルダたちやファウスト家に仕える者たちは知っているのだが、夫君であるヨハネスにのみエリーゼがこのような口調に変わるのだ——というよりも、以前は此方の口調であることの方が常であったようだ。公の場では決してボロを出さないで、この事実を知る者は圧倒的に少なく、ヨハネス曰く「餌の要らない大きな猫を飼っているらっしゃる御蔭」なのだとか。

——ふむ、ならば良いのですがね？

——ゼルダ様が決めたんなら、アタシはとやかく言う気はないね。

エリーゼと文字のやり取りを交わしたヨハネスは頤に手を当て、何やら考え込んだ。

「まあ、明日は御別れ会を盛大に致しましょうかね？しんみりしたのは苦手ですね、私」

「……静寂をこよなく愛してるとかぬかしてたのは何処のどいつだ？ああ？」

量の少ない食事を再開したヨハネスを、エリーゼが睨みつける。

「はて、何処の何方なのでしょうね？細かいことを気にしてはいけませんね、愛しのエリちゃん」

「テメエは本当にああ言えばこう言う野郎だなあ、おい！」

額に青筋を浮かべたエリーゼが、ヨハネスの白いこけた頬を全力で抓る。彼は痛みを訴えているが、痛覚が存在していないのではないだろうかと思ってしまうほどに表情が変わらない。

「ふむ？彼奴らの夫婦漫才は傍から眺めている分には一興であるな？」

「左様に御座いますわね」

「……同感です」

呆れた様子でゼルダが呟くと、後ろで控えているベルガらは主の意見に同意して、深々と頷いた。

夫婦漫才はやがて夫婦喧嘩——エリーゼ優勢、ヨハネス防戦一方——へと発展していくのだが、誰一人としてファウスト夫妻を止めようとするものはいないのだった。

翌日の夕刻。

”伏魔殿への御帰り御愁傷様パーティー”と銘打った、ゼルダ三人の御別れ会がファウスト邸の庭で催された。

ファウスト家お抱えの料理長が腕を振るい、ゼルダらが狩ってきた猪を使ったものなどの様々な料理が幾つもの机の上に並べられている。食べたい料理を小皿で取り、自由に食べる立食形式を取っており、使用人たちも交えて賑わっていた。

「うむ。矢張りゾイゼの作る料理は絶品であるな」

香辛料を利かせたソースのかけられた猪肉の串焼きを頬張りながら、ゼルダはしみじみと呟いた。

「ゼルダ様、あまり食べ過ぎますと御腹を壊してしまいますわよ？」

次々と空になっていく皿をてきばきと片付けながら微笑むベルガの

横で、一見巨人族と間違えてしまいそんな大柄の髭面の男がめそめそと泣いている。

「うつつ……黒鋼の君がいなくなってしまうわれたら……料理の作り甲斐がなくなってしまううつつ……」

強面の大男——料理長のゾイゼは、外見に似合わず繊細で美しく、且つ大変美味な料理を作る。手間暇かけた料理を味わっているのか、味わっていないのか、兎に角食べまくる黒鋼の君——ゼルダを彼は気に入ってくれているらしい。何でも、美味しそうに食べまくる姿に好感を持ったのだとか。

手にしたハンカチは既に涙でびっしょりと濡れて機能を果たしておらず、絞ったら溜め込んだ水分がだらだらと出てきそうなくらいだ。

「僕はニヴルヘイムに来てから、すっかり舌が肥えてしまった……。それもこれもゾイゼの所為であるぞ！？美味しいものばかり作りおつて！アスガルドへ戻ったら……僕は……僕は痩せこけてしまうのではないかあああああつ……」

「黒鋼の君いいい！何と有難い御言葉！このゾイゼ、幸せに御座いますうつつ……」

小娘と熊男はがっしりと抱き合い、おいおいと泣き始める。

「御土産を用意致しますので、楽しみにしておいてくださいませええええつ……」

「ザッハトルテが食したいのだあああつ！桜桃ケーキもチーズケーキも食したいのだああああつ！というか、ゾイゼを連れて行きたいのだ、僕の胃袋の為に……」

「あ、それは駄目ですのでね、我が君」

「チイツ!!!」

御土産のリクエストをしつつ、本音をサラリと溢したゼルダにいつの間にやら傍にやって来ていたヨハネスが突っ込みを入れると、ゼルダは凄い顔をして舌打ちをした。
そんなやりとりをして盛り上がっている彼らを、周囲の者たちは生暖かい目で見守っているのだった。

「うーん、ゼルダ様は御酒でも飲まれているのかな？」

少し離れた席でゼルダらを眺めていたルーディは、隣で黙々と食事をしているベルトに語りかけた。

「先程、ジンジャーエールと間違えて麦酒^{ビア}を、葡萄ジュースと間違えて葡萄酒^{ワイン}を飲まれていた。ゼルダ様は鼻が良い筈なのだな？」

「……止めなかったのかい？」

「止める間もなく飲まれてしまった」

酔っ払っているかのようにテンションが高かったので何となく尋ねてみたのだが、本当に酒を飲んでいるとは思わなかった。淡々と事情を話す親友に、ルーディは苦笑したのだった。

「ゼルダ様はああ見えて成人を迎えておられるから、問題はない。若しも悪酔いをして暴れようものならベルガが止めるだろう、息の根を」

「いやいや、息の根は止めたら駄目だからね？うーん、庭まで破壊されたら流石のヨハネス様でも泣くだろうね。誰よりも嘆くのは庭師のゼーテだけど」

ゼルダは二日前に応接間を大破させたばかりだ。

お気に入りの家具を多数破壊されてしまったヨハネスが、風穴の開いた応接間だった部屋を眺めて黄昏ている——ように見えるような見えないような姿を目撃しているルーディは、乾いた笑いを浮かべた。

「……どうかしたのかい、ベルト？」

付き合いの長いルーディだからこそ分かる程度に、ベルトは不思議そうな顔をして彼を見ていた。

「お前はヨハネス様を別の呼び名で呼ばなくてはならないのではなかったか？」

確か、”パピー”と。

それを強要されている現場を、ベルトは目撃し、記憶していた。

「……あれは本人の前だけで良いじゃないか。あれはね、結構くるものがあるんだよ？本人のいないところとかでは、そう呼ばなくても良いじゃないか……」

「そうか、悪いことを言った」

膨れっ面をしたルーディが、不意に表情を失くした。

「どうした？」

「……また、”あの頃”のゼルダ様に戻らないと良いんだけどな
て思っ、て、ね。君も、ベルガも……」

彼の脳裏には、ニヴルヘイムにやって来たばかりの頃の彼らの姿が
浮かんでいるようだ。

大切な二人以外には断じて心を開こうとはせず、頑なに疑心暗鬼の
目で他者を睨みつけていたゼルダはどこか悲しげに見えたことが思
い出される。

「……このままでいられたら、良かったのにね」

皇帝が使者など寄越さなければ良かったのだ。

”ミームルの首”が”神々の運命”^{ラグナレク}の時が訪れると告げなければ。

「……そうだな」

ふと視線を下げてみると、ルーディの目につつすらと涙が浮かんで
いるのが見えた。泣き出しそうな顔をした彼の肩に手を置くと、ベ
ルトは少しだけ、ほんの少しだけ苦笑した。

「お前は他人の心配ばかりをする。何れ胃に穴が開くぞ」

「……大丈夫だよ。胃薬は常備しているからね」

錠剤の詰まった小瓶を見せられたベルトは、そのようなことをしな
ければならないようなことがあっただろうか考えた。

「……そうか」

彼の琥珀の目が、ゼルダの側で夫婦漫才を繰り広げる”死にかけ公爵”に向けられる。 澱んだエメラルドの双眸が「何か用ですかね？」と此方に向けられたような気がしたので、ベルトは素早く目を逸らしたのだった。

「……………む？」

重たい瞼を抉じ開けてみると、見慣れた天蓋が目に入ってきた。 ゆっくりと首だけを動かして状況を確認してみると、自室のベッドの上に転がされているのだということが知れた。

「むー……………？」

確か調子に乗って、水のように麦酒や葡萄酒を飲み酔い潰れたのだっただか。

記憶が途切れる寸前のことを思い出した途端に、飲みすぎで起こる頭痛が存在を訴え始めたのでゼルダは顔を顰めて頭を押さえた。 ふとサイドテーブルに目を向けると、水の入った瓶と硝子のコップが置かれていることに気が付いた。 恐らく、誰かが用意しておいて

くれたのだろう。

ゼルダは痛む頭を押さえつつ、のろのろと起き上がり、水を一気に飲み干して喉を潤した。

「うー……これでは二日酔いは確実であるな……」

病原菌に耐性のない”アルファズル”は、アルコールへの耐性もないに等しい。酷いと、酒の匂いを嗅いだけで酔っ払ってしまうほどだ。

ゼルダは其処までは酷くはないが、それでも常人より酒に酔いやすく、体内に入ったアルコールが分解される速度も非常に遅い為、嗜む程度の酒量で二日酔いになるのはざらだった。

明日への不安を酒を飲むことで掻き消したかったとはいえ、飲みすぎたと反省する。

「ベルガに解毒して貰わねばな……」

彼女はきつと呆れながらも、癒しの力で以て二日酔いを治してくれるだろう。そんなことを考えながら、ゼルダは両腕を交差するようにして顔を多い、視界を塞いだ。

「……戻りとうない、のう……っ」

幸せで楽しかった日々も、今日までだ。

これからどうなるのかは、誰にも分からない。

それを実感した途端に堰を切ったように涙が溢れ出し、ゼルダは声を押し殺して泣いた。

——旅立ちの朝。

ゼルダらは大広間に集まっていた。この場から、ベルトの力を利用してアスガルドへと一気に移動するのだ。態と”ヘイムダル”に感知されるように。

「……のう、ルーディ？」

ベルガの手によって二日酔いから解放されたゼルダは、怪訝な表情でルーディを見上げた。

「はい、如何されましたか？」

彼は穏やかな表情で首を傾げる。

今朝になって聞かされたのだが、急遽ルーディも付いて来ることが決定したのだという。それは何故なのかは、分らない。

「我らと共にアスガルドへ参っても良いのか？ミイの薬は、汝が管理しているのではなかったかの？」

ミイ、とはファウスト夫妻の一人娘であるマリアのことだ。

謎の病に侵されている彼女は、研究好きのルーディが偶然作り出した薬で病気の進行を止めている状態で、生来病弱でもあったことも

あり床に臥せっている日々が多い。昨日の昼に会いに行つた時に見送りに来ると言っていたが、今日は身体の調子が思わしくなかったらしく彼女は今此処にはいない。

「大丈夫です。作り置きのかきく薬ですし、僕だけではなくエリーゼ様も調合が御出来になれますから。それにミイに頼まれたんです、ゼルダ様が心配だから自分の代わりに付いていつてあげて欲しいと……」

「ミイ……」

「……というのもあるのですが、ヨハネス様に『ルーくんも付いてきてくれないとヤダ』と駄々をこねられたのもありまして……」

草臥れた様子のルーデイが視線を向けた先には、全身を覆う白色のボディスーツを着用し、遮光硝子のつけられた球状のヘルメットを装着した得体の知れない何かが佇んでいた。

「……アレは、何であるか？」

大体想像はついているのだが、ゼルダは敢えて尋ねてみた。

「……日光を遮断する特製スーツを着込まれたヨハネス様です」

「……そうであるか」

ルーデイが開発したらしいそれを着込んでいるヨハネスは、此方の視線に気が付いたのか、のたのたと歩きながら近付いてきた。その異様な風体にゼルダは思わずたじろぎ、数歩後退つたのだった。

「そろそろ、あちらへと向かいますかね？」

通りの悪い声は、ヘルメットを介すことでより一層聞き取り辛くなっている。

「……それは良いのだがな、ハンス？ 汝は何故、そのような珍妙な格好をしておるのだ？ まさかとは思うが、そのままアスガルドへ赴くのではあるまいな？」

「ふむ、その心算なのですがね？ アスガルドは無駄に明るいので、私の御目目が潰れかねませんし、身体が焦げてしまいかもしれませんのでね？ 何か問題でもありませんかね？」

それほどまでに日光が嫌いか。

年中曇り空のニヴルヘイムで生まれ育った”ニールンク”は日光が少し苦手だと言われているが、暫く別の土地で過ごせば慣れてしまい問題はなくなるという。

だが、ヨハネスはそうではないらしい。

ここまで徹底されると呆れを通り越して、何故だか尊敬の念を抱きそうになってしまう――が、ゼルダは頭^{かぶり}を振って、その恐ろしい考えを払拭した。

断じて、尊敬するようなことではないからだ。

「……承知した。良いか、僕は今より汝とは他人の振りをする。断じて僕に近寄るでないぞ」

「ふふふ、そのようなことはさせませんのでね、我が君？」

向こう側の見えない遮光硝子のせいで分からないのだが、ヨハネスがにやりと笑っているような気がした。

——今のは失言だったか。

”歩く傍迷惑”とも言われる”死にかけ公爵”の心に火をつけてしまったようだ、ゼルダは後悔したのだった。

「……ゼルダ様」

柔らかい声音に誘われて顔を向けると、其処には寂しげに微笑むエリーゼがいた。

「これはわたくしとミイから、ゼルダ様への贈り物ですわ。御守りとして、御持ちくださいませな」

そう言つて、彼女はゼルダの首に何かをかける。手にとって見てみると、それはゼルダの目と同じ色をした小さな石の付いた簡素な首飾りだった。聞けば、この石を見つけたミイが手ずから首飾りに仕立ててくれたのだそうだ。

「……大切に……大切に。礼を言うぞ、エリーゼ、ミイ……」

「そのようにして頂きますと、嬉しゅう御座いますわ」

エリーゼは、ゼルダを力強く抱き締める。彼女の腕の中に抱き込まれた折に、ふわりと優しい香りが鼻孔を撫った——ベルガと同じようにゼルダに安らぎを与えてくれるエリーゼの匂いだ。

「どうか……どうか、御無事で……息災であらせられますよう……」

「……うむ」

微かに震える細い身体を、ゼルダは壊れ物を扱うように抱き締め返

した。

「……それでは、な」

約束したように土産を持たせてくれた料理長のゾイゼは、昨夜あれほど泣いていたというのに今もまた号泣している。他の使用人たちも寂しそうに此方を見ていた。

エリーゼは涙を堪えているのか、俯いていた。

ベルトが前方に手を翳して、この場とアスガルドを繋ぐ”門”を作り出す。

まずはベルガとルーディが”門”を通り抜けていくと、ヨハネスとゼルダも続いた。最後にベルトが”門”の向こう側へと姿を消すと、”門”は僅かの後に消え去った。

ゼルダらはもう、アスガルドの土を踏んでいる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、^{たんのう}堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1901w/>

我は希う、混沌の其の先を

2011年11月1日10時05分発行